日本遺産を旅する

「いざ、鎌倉」
―歴史と文化が描くモザイク画のまちへ―

鎌倉文士と別荘文化

小林秀雄（前列左）や川端康成（前列左から4番目）ら、文芸雑誌『文學会』の編輯同人。神奈川近代文学館蔵

鎌倉文士らがぼんぼりを奉納し始まった、鶴岡八幡宮のぼんぼり祭。

監修
鎌倉文学館館長　富岡幸一郎さん

1957年東京生まれ。中央大学仏文科卒業。在学中、「意識の暗室―埴谷雄高と三島由紀夫」で『群像』新人賞優秀作を受賞し評論活動に入る。関東学院大学教授。著書に『川端康成 魔界の文学』他。鎌倉市の雪ノ下在住。

日本遺産のストーリー

鎌倉は、源頼朝によって幕府が開かれた後、急速に都市整備が進められ、まちの中心には鶴岡八幡宮、山には切通し、山裾には禅宗寺院をはじめとする大寺院が造られた。

この地に活きた武士たちの歴史と哀愁を感じられる古都鎌倉は、近世には信仰と遊山の対象として脚光を浴び、近代には多くの別荘が建てられたが、歴史的遺産と自然とが調和したまちの姿は守り伝えられてきた。

このような歴史を持つ古都鎌倉は、自然と一体となった中世以来の社寺が醸し出す雰囲気の中に、各時代の建築や土木遺構、鎌倉文士らが残した芸術文化、生業や行事など様々な要素が、まるでモザイク画のように組み合わされた特別なまちとなったのである。

一個人　特別編集

神奈川県
鎌倉市

鎌倉ゆかりの文学者の直筆原稿や手紙などを収集保存展示する鎌倉文学館。

鎌倉武士の質実で自由な気風を好み 新たな文化を開花させた鎌倉文士

川端康成『山の音』原稿

戦後日本文学の最高峰とも評される長編小説。鎌倉の長谷で暮らす初老の信吾と、その家族を書いた作品。鎌倉最古の神社、甘縄神明宮のある山が舞台とされている。 日本近代文学館蔵

第4回鎌倉カーニバルの大佛次郎 昭和12年(1937)7月25日

右下の正面を向いている人物が大佛次郎。左上はこの年の主神「帆立貝に乗った美の神」。堀口大學の詩「海の廃墟」の材となった。 大佛次郎記念館蔵

『文學界』創刊号

昭和8年（1933）10月創刊。川端康成、林房雄、小林秀雄、横光利一（りいち）らの作品を掲載。新興芸術派やプロレタリア作家が分け隔てなく並んだ。 鎌倉文学館蔵

甘縄神明宮（あまなわしんめいぐう）

鎌倉市長谷の川端康成邸裏の山が『山の音』のモデルと考えられる。石段を登ると由比ガ浜と長谷の町を一望できる。 神奈川県鎌倉市長谷1-12-1

横山隆一画 鎌倉文庫ポスター

昭和20年5月、鎌倉文士らが開店した貸本屋「鎌倉文庫」のポスター。漫画家の横山隆一が人気キャラクターのフクちゃんを描いた。 鎌倉文学館蔵

鎌倉の武士と文士に通じる「鎌倉スピリット」

12世紀末、源平の合戦で平氏を滅ぼした源頼朝は征夷大将軍となり、鎌倉に幕府を開いた。ここに日本初の本格的な武家政権が誕生し、元弘3年（1333）に幕府が滅亡するまで、鎌倉は政治、軍事、文化とあらゆる面で日本の中心地として発展した。

南に穏やかな相模湾が広がり、三方を山に囲まれた鎌倉は、近代になると古都の風情と豊かな自然に恵まれた保養地として人気を集めた。明治22年（1889）に横須賀線が開通すると、その人気は高まり政財界人や華族らの華やかな別荘文化が開花するとともに、多くの文学者も訪れた。明治27年（1894）、夏目漱石は円覚寺塔頭の帰源院に参禅し、その体験を小説『門』に著わしている。さらに昭和に入ると鎌倉に住む文学者が増え、彼らは「鎌倉文士」と呼ばれるようになる。鎌倉文学館館長の富岡幸一郎さんは語る。

「流行作家の久米正雄や大佛次郎（おさらぎ）、里見弴（とん）らが暮らしていた鎌倉に、新進評論家の小林秀雄や、新鋭作家の林房雄、川端康成、深田久彌（きゅうや）らが移り住みました。なぜ彼らが鎌倉に集まったのかというと、一番大きな要因は、昭和8年（1933）に創刊された同人雑誌『文學界』の存在でした。自分たちで編集し、新人を発掘して、文芸の潮流を生み出したのです。すでにプロの作家として活躍していた彼らがそうしたことを始めた理由は、当時の社会情勢にありました」

満州事変以降、戦争が激化するなか、プロレタリア作家の小林多喜二が虐殺されるなど、文学を取り巻く雰囲気は日に日に重くなり、文学者らは作品発表の場さえ失っていた。そこで創刊された『文學界』は、若手作家もベテラン作家も主義主張に囚われず文芸復興をめざした文学者らによる文芸雑誌だった。川端康成は、この雑誌の編集を引き受けた小林秀雄や林房雄らの思いに応えて鎌倉に移住したという。

さらに昭和9年（1934）に始まった若宮大路（おおじ）を仮装パレードする「鎌倉カーニバル」の発案や、昭和11年（1936）の鎌倉ペンクラブの発足など、『文學界』をきっかけとしてまとまった鎌倉文士たちは、戦争下の社会不安のなかで、市民と一体となり文化を開花させていった。終戦間際の昭和20年（1945）5月、久米正雄、川端康成らが世話人となり、鎌倉文士が手持ちの本を持ち寄って若宮大路に開店した貸本屋「鎌倉文庫」は、空襲警報の合間を縫い、人々が詰めかけるほど大繁盛したという。それは大変大きな力だったと富岡さんは続ける。

「戦争中、言論が弾圧されるなか、鎌倉文士たちは主義主張を越えてまとまり、自分たちの文学を守るために立ち上がりました。そこには鎌倉武士の〝名こそ惜しけれ〟の精神、つまり命を賭してでも矜持を守るべしという鎌倉スピリットが共通して流れていると思います」

鎌倉文士にゆかりの深い旧前田侯爵家別邸

鎌倉文学館

旧前田侯爵家の鎌倉別邸だった当時の雰囲気をとどめる館内。ステンドグラスや半六角形の張り出し窓などの意匠が凝らされている。

鎌倉ゆかりの文学者は川端康成、夏目漱石、芥川龍之介ら300人以上。年4回ほど企画展を開催するほか、常設展示も入れ替える。

格式高い趣の玄関を入ると、赤い絨毯のエントランス。かつては玄関ホールだった。ミュージアムショップも併設されている。

旧前田侯爵の別荘 作家らが集い小説にも登場

緑の山に埋もれるように建つ、木造の建築。春と秋には庭園のバラ園が見頃を迎え、眼下には相模湾が広がる。

鎌倉文学館は、かつて加賀百万石の藩主で知られる前田利家の系譜、旧前田侯爵家の別邸だった。現在の本館は昭和11年（1936）に完成したもので、戦後は内閣総理大臣、佐藤栄作が別荘として借りていた時期もある。館長の富岡さんは当時についてこう語る。

「佐藤栄作はこの洋館のバルコニーで演説の練習をしたというエピソードが残っています。当時、小林秀雄や川端康成らが佐藤栄作のもとを訪れ交流していたそうです」

また、三島由紀夫はこの別邸をモデルに小説『春の雪』に登場する別荘を書いた。

その後、第17代前田家当主が本館を鎌倉市に寄贈。昭和60年（1985）、鎌倉ゆかりの文学者の著書や直筆原稿、愛用品などの文学資料を収集保存し、展示する鎌倉文学館として開館した。初代館長には鎌倉文士のひとり、永井龍男が就任した。

緑豊かな敷地内は、別邸時代の雰囲気をそのままとどめ、源頼朝がツルを放ったという故事にちなむ石のトンネル「招鶴洞（しょうかくどう）」などがある。坂を上るごとに下界から隔絶されたような山の空気に包まれる。

和洋の様式が混在する独特のデザインによる建築も、ほぼ往時のまま。バルコニーがある居間などが展示室として使われ、鎌倉ゆかりの文学者らの貴重な資料を見ながら、華やかなりし鎌倉の別荘文化を体感できる。

バラ園のある庭園を前に建つ。春のバラは5月中旬から6月下旬、秋のバラは10月中旬から11月下旬に見頃を迎える。

鎌倉文学館

神奈川県鎌倉市長谷1-5-3
☎0467-23-3911
3～9月 9：00～17：00（入館16：30まで）、
10～2月 9：00～16：30（入館16：00まで）
㊡月曜（祝日の場合は開館）、年末年始
観覧料 一般300～400円、小・中学生100～200円
※展覧会によって異なる。
http://www.kamakurabungaku.com

鎌倉文士の邸宅を巡る

旧里見弴邸／石川邸

六角形の窓枠などにフランク・ロイド・ライトの影響が見られるロビーと応接間（上、右下）。
茶室仕立ての離れ(左下)は、志賀直哉邸を建てた京都の大工を呼び寄せて増築。

里見弴が設計に関わった和洋折衷の建築

明治から昭和にかけて活躍した里見弴は、兄の有島武郎、有島生馬とともに芸術家兄弟といわれた鎌倉文士のひとりだ。雑誌『白樺』の創刊に参加し、小説のほかに翻訳や詩歌を発表したのち、白樺派を離れて独自の道を歩み、泉鏡花に師事して文学的影響を大きく受けた。

里見弴は亡くなる昭和58年（1983）まで、60年近く鎌倉に住み、数々の名作を残した。現在、イベントスペースなどとして一般に門戸が開かれている「西御門サローネ」の建物は、大正15年（1924）、里見自身が設計に関わり、住んだ家。家族のために築いた邸宅とされ、フランク・ロイド・ライト風の洋風建築を取り入れ、玄関ポーチやバルコニーが当時としては非常に斬新だった。とはいえ、奥には京都の大工に造らせた茅葺屋根の和室があり、そもそも日本建築を好んだという文士の嗜好が伝わる。

現在は石川家の住居で、鎌倉市景観重要建築物に指定されている。80年の歳月を超えてなお色褪せない魅力と風格を放つ貴重な建築だ。

西御門サローネ（にしみかど）

神奈川県鎌倉市西御門1-19-3
☎0467-23-7477
開館／毎週月曜日11：00～16：00
入館料500円
貸しスペースとしても利用可能
www.nishimikado-salone.jp

里見弴

明治21年（1888）、横浜に生まれる。雑誌『白樺』の創刊に兄の有島武郎、有島生馬とともに同人として参加した。おもな作品に「多情仏心」「安城家の兄弟」「極楽とんぼ」など。

里見弴と家族　鎌倉文学館寄託

旧吉屋信子邸

近代数寄屋建築の第一人者が設計した終の棲家

『花物語』で少女小説というジャンルを成熟させ、女学生らの人気作家となった吉屋信子。晩年は70歳で初めて書いた歴史小説『徳川の夫人たち』など、長年培われた知見に基づいた円熟味のある作品を発表し、文学界で高い評価を得た。

長谷の閑静な住宅街にある吉屋信子記念館は、生涯独身を通した吉屋信子が秘書の門馬千代と暮らした家。近代数寄屋建築の第一人者といわれた吉田五十八が、「奈良の尼寺のように」と望まれて設計。吉屋は66歳から亡くなるまでこの家に住み、晩年も旺盛に執筆活動を続けた。

天井のデザインが特徴的な応接間や、窓に藤棚が映る北向きの書斎など、ほぼ当時のまま保存されている建物は、女流作家の息づかいが感じられるようだ。

応接間(上)は、前庭側に大きくとられた窓が特徴的。北向きの書斎(下)の窓は雪見障子になっている。ガラス戸は戸袋に収納でき全面開放できる。

吉屋信子

明治29年(1896)生まれ。連載小説『花物語』が当時の女学生から厚い支持を得る。『地の果まで』などで大衆小説作家としての地位も確立。晩年は歴史小説を発表し高い評価を得る。

自宅居間にて

吉屋信子記念館

神奈川県鎌倉市長谷1-3-6
一般公開日／4・5・6・10・11月の毎週土曜、5・6月の毎週日曜、6・10・11月の1～3日、ゴールデンウィーク期間は毎日
公開時間／10：00～16：00
入館料／無料　学習施設としても利用可能(要予約)
問鎌倉市教育部教育総務課生涯学習センター
☎0467-25-2030

旧川喜多邸別邸(旧和辻邸)

海外映画のファンが憧れる名監督や俳優が招かれた

哲学者和辻哲郎が居住した江戸時代後期の古民家を、川喜多夫妻が東京都から移築。映画による国際交流に貢献した夫妻が、海外から訪れる映画監督や俳優たちを迎える場として利用していた。アラン・ドロン、フランソワ・トリュフォー監督ら往年の名だたる映画スターや監督らがこの家を訪れた。

旧市街地の高台に建ち、背後の山並みと桟瓦葺きの屋根が調和した和風建築の内部は、太い梁や柱に支えられた土間があり、独特の風情がある。作りつけの書棚がある和室は、和辻哲郎が書斎として使っていた部屋で、落ち着いた雰囲気をとどめる。居間の隅には炉が切られ、畳の上にはテーブルと椅子が置かれるなど、海外からの客人を日本情緒豊かな空間でもてなしたことを物語る。

調度品は川喜多夫妻が使用していたもの。同敷地内にある旧宅跡は現在、鎌倉市川喜多映画記念館となっている。

ヴィム・ヴェンダース監督はこの縁側で『東京画』の笠智衆を撮影した。

川喜多長政・かしこ

昭和3年(1928)、長政がヨーロッパ映画輸入のために東和商事を設立。かしこ夫人とともに、数々のヨーロッパ映画の名作を日本に紹介。国際交流にも貢献した。

別邸書斎にて

旧川喜多邸別邸(旧和辻邸)、鎌倉市川喜多映画記念館

神奈川県鎌倉市雪ノ下2-2-12　☎0467-23-2500
※旧川喜多邸別邸は公開日やイベント時に見学可
[鎌倉市川喜多映画記念館]
9：00～17：00(入館は16：30まで)
㊡月曜、年末年始など
観覧料 一般200円～、小・中学生100円～
映画鑑賞料 一般1,000円、小・中学生500円
http://www.kamakura-kawakita.org/

鎌倉文士ゆかりの文化に触れる

鶴岡八幡宮（つるがおかはちまんぐう） ぼんぼり祭

昭和13年から鎌倉文士らがぼんぼりを奉納

鎌倉の夏の風物詩となっている「ぼんぼり祭」が始まったのは、昭和13年（1938）。久米正雄が会長を務めていた鎌倉ペンクラブをはじめ、鎌倉在住の名士らの協力のもと、鶴岡八幡宮の主催で開催されるようになった。

8月の立秋の前日から9日まで、鎌倉近在の文化人、各界の著名人らが揮毫した書画約400点がぼんぼりに仕立てられ、参道や流鏑馬（やぶさめ）馬場、舞殿周りに並ぶ。立秋の前日には夏の邪気を祓う夏越祭（なごしさい）、立秋当日には立秋祭、源実朝の誕生日にあたる9日には実朝祭が執り行われる。夏の夕刻、ぼんぼりの灯りが風情を感じさせてくれる。

夕刻になるとぼんぼりに灯りがともされ、鶴岡八幡宮の境内が幻想的な光景になる。祭り期間中は、夜まで多くの人々で賑わう。

鶴岡八幡宮

神奈川県鎌倉市雪ノ下2-1-31　☎0467-22-0315

ぼんぼり祭／毎年8月立秋の前日から9日まで　https://www.hachimangu.or.jp

鎌倉彫（ぼり）

仏像彫刻の技術をもとに生まれた洗練の工芸品

鎌倉彫とは、カツラなどの木を用いて木地を成形し、文様を彫り、その上に漆を塗って仕上げた鎌倉の工芸品だ。

鎌倉時代、運慶の活躍以降、鎌倉には多くの仏師が育ち、中国から禅宗とともに伝来した堆朱（ついしゅ）や堆黒（ついこく）などの影響を受け、木彫漆塗りの技法で仏具を作っていった。

明治元年（1868）、明治政府が公布した神仏分離令により廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の嵐が吹き荒れると、仏師の仕事は激減。仏師たちは、鎌倉に別荘を構えた政界人や華族など上流階級のニーズに合わせて、仏像彫刻の技術を生かした家具や調度品の製作を主体とするようになった。

これが良質な日用品を求める人々に広まり、現在も、鎌倉を代表する伝統的工芸品として土産物や贈答品としても重宝されている。

彫刻刀で文様を浮き上がらせ、各種の刀を使い分け肉付け。これに漆を重ね、丁寧に仕上げていく。

牡丹や唐草、獅子、龍など文様はさまざま、現代生活に取り入れやすいデザインのものも多い。 撮影協力／博古堂

伝統鎌倉彫事業協同組合
鎌倉彫工芸館

神奈川県鎌倉市由比ガ浜3-4-7

☎0467-23-0154

9：00～17：00（土曜9：00～16：00、日曜・祝日11：00～16：00）

㊡月曜（月曜祝日の場合、火曜休館）

鎌倉文士ゆかりの寺を巡る

鎌倉アカデミアの仮校舎 光明寺

鎌倉時代の創建とされる浄土宗の大本山。昭和21年（1946）、ここに既成概念にとらわれず自由な気風に満ちた教育方針を掲げる私立学校「鎌倉アカデミア」が開校。高見順らが教授となり、作家の山口瞳や作曲家のいずみたくら、多くの若き才能を輩出。創立から4年後に財政難から廃校となったが、その功績は大きい。

鎌倉有数の大伽藍を誇る。境内には鎌倉アカデミアの記念碑が立つ。

光明寺（こうみょうじ）

神奈川県鎌倉市材木座6-17-19　☎0467-22-0603

葛西善蔵の魂の故郷 建長寺

鎌倉五山第一位であり、臨済宗建長寺派の大本山。大正時代、「苛烈の文学」と評された私小説作家の第一人者で、無頼な生涯を送った葛西善蔵（かさいぜんぞう）が、大正8年（1919）から約4年間、塔頭（たっちゅう）の宝珠院に居住して創作活動をした。そのほか、大佛次郎の『帰郷』、藤沢周の『武曲』など、古今の小説に建長寺が描かれている。

建長5年（1253）、北条時頼建立の日本初の禅宗専門寺院。法堂の雲龍図は圧巻。

建長寺

神奈川県鎌倉市山ノ内8　☎0467-22-0981

拝観時間／8：30～16：30　拝観料大人300円、子供100円

http://www.kenchoji.com

与謝野晶子が歌を詠む 鎌倉大仏殿高徳院

高さ約13メートル、重量121トンの青銅製の国宝、鎌倉大仏。作者不明だが、運慶から続く慶派の作風と、宋代中国の仏師たちからの影響の双方を併せもつ、鎌倉期らしい仏像とされる。観月堂の傍らには、「かまくらや　みほとけなれど　釈迦牟尼は　美男におはす夏木立かな」と詠んだ与謝野晶子の歌碑が建つ。

鎌倉文士との関わりが深く、境内には与謝野晶子のほか4つの句碑が建つ。

鎌倉大仏殿高徳院

神奈川県鎌倉市長谷4-2-28

☎0467-22-0703

拝観時間／8：00～17：30

（10～3月は17：00まで）

http://www.kotoku-in.jp/visit.html

漱石ゆかりの円覚寺塔頭 帰源院

明治27年（1894）、当時28歳の夏目漱石は、鎌倉時代後期創建の臨済宗大本山・円覚寺に15日間参禅、塔頭の帰源院に滞在した。このときの参禅体験が、15年後に発表された小説『門』に再現され、『夢十夜』の第二夜にも取り入れられている。帰源院には境内に漱石の句碑が建つほか、手紙などが残っている。

円覚寺の塔頭、帰源院。夏目漱石と帰源院住職との交流を物語る手紙が残る。

帰源院

神奈川県鎌倉市山ノ内416

☎0467-22-9218

拝観不可

（敷地外から漱石の句碑を遠望可）

鎌倉文士と別荘文化ゆかりの地

＊赤字はP2～7で紹介したスポット。青字は以下で紹介するスポットです。

瑞泉寺

鎌倉公方の菩提寺とされる禅宗の寺院。夢窓国師が岩盤を削り作庭した「岩庭」は禅の思想と庭が見事に融合している。永井龍男が『秋』の舞台とするなど多くの作家が訪れた。

神奈川県鎌倉市二階堂710
☎0467-22-1191
拝観時間／9：00～17：00
（入門は16：30まで）
http://www.kamakura-zuisenji.or.jp/

長谷寺（はせでら）

坂東観音霊場の第四番札所で古くから民衆の信仰を集めてきた。高山樗牛が境内に住まい、久米正雄は関東大震災時にここに避難し難を逃れるなど、鎌倉文士にゆかりが深い。梅雨の季節には約2500株のアジサイが咲き誇る。

神奈川県鎌倉市長谷3-11-2
☎0467-22-6300
拝観時間／3～9月 8：00～17：00
（閉山17：30）、
10～2月 8：00～16：30
（閉山17：00）
http://www.hasedera.jp/

旧華頂宮邸

昭和4年（1929）に華頂博信侯爵が邸宅として建てた鎌倉三大洋館のひとつ。ハーフティンバースタイルの洋風建築で、フランス式の幾何学庭園では四季折々の花や緑を楽しめる。

神奈川県鎌倉市浄明寺2- 6-37
☎0467-61-3477（鎌倉市都市景観課）
庭園の公開時間／4～9月 10：00～16：00、
10～3月 10：00～15：00

古我邸

大正5年（1916）三菱合資会社の専務理事兼管事・荘清次郎の別荘として15年かけて建てられた鎌倉三大洋館のひとつ。現在はフレンチレストランとして利用されている。

神奈川県鎌倉市扇ガ谷1-7-23
☎0467-22-2011
（レストラン予約専用 ☎050-2018-0289）
㊡火曜
㊐ランチ 11：00～15：00（LO14:00）
ディナー 17：00～21：00（LO19:30）
http://kamakura-koga.com/

このパンフレットのお問い合わせ先：日本遺産いざ鎌倉協議会（事務局：鎌倉市歴史まちづくり推進担当　☎0467-61-3849）
このパンフレットは平成28年度文化芸術振興費補助金（日本遺産魅力発信推進事業）により作成したものです。

文化庁